

蟹屋の土産



三浦哲

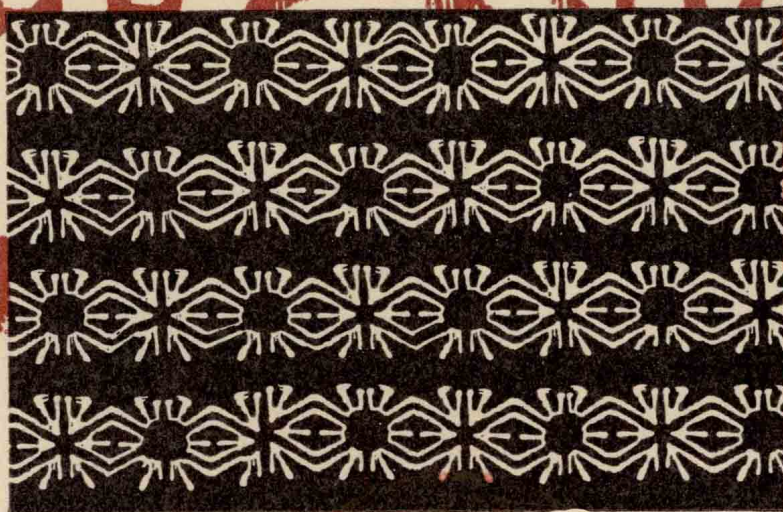


三浦哲郎

蟹屋の土産

蟹屋の土産

三浦哲郎





三浦哲郎（みうら・てつお）

一九三一年、青森県八戸市に生まれる。早稲田大学仏文科卒。六一年、「忍ぶ川」で第四回芥川賞受賞。七六年、「拳銃と十五の短篇」で野間文芸賞を、八三年、「少年讀歌」で日本文学大賞を受賞する。その他の著書として「笹舟日記」「海の道」「駱駝の夢」「野」「木馬の騎手」「おろおろ草紙」などがある。

蟹屋の土産

一九八三年八月一五日第一刷発行
一九八三年一〇月一〇日第二刷発行

定価一六〇〇円

著者 三浦哲郎

発行者 株式会社 福武哲彦

発行者 株式会社 福武書店

東京都千代田区龜町六一六
〒一〇三 電話(〇三)二二〇二二三
振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

(落・乱丁はお取替え致します)

蟹屋の土産——目次

歆
楽

101

童
女
抄

79

若
草

57

肉
体

31

ひ
と
り
遊
び

7

余命

133

お菊

153

ほおずき

177

せせらぎ亭

191

蟹屋の土産

225

装丁
田村義也

蟹屋の土産

ひとり遊び

一

仕事机の右脇に、物をのせるための低い小机があつて、そこに、茶道具などと一緒にわさび色の電話が置いてある。

夜ふけに、その電話のダイヤルをまわす。先は地方だから、十回まわす。十個の数字は、たとえば五九六を御苦労と読むようにして憶えているから、いちいち控えることもない。

たまには、数字の穴を一つ間違えたり、一つの数字をまわす途中で指先が穴から外

れてしまったりすることもある。寢酒に酔っているからである。指が言うことを聞いてくれない。うつかりしていると、勝手に動いて、隣の穴に滑り込んだり、数字を一つ抜かして次の穴に飛び込んだりする。

まわし損ねたときは勿論のことだが、途中で、待てよ、さっきは穴を一つ間違えたのでは、と自信が持てなくなるときは、いさぎよく御破算にして、最初からやり直す。なにしろ世の中が寝静まっている夜ふけだから、間違えてかけたりしては他人に迷惑をかける。

ダイヤルをまわし終えたら、受話器を耳に当てたまま、ブランデーのグラスはもとより煙草もライターも灰皿も、すぐ手が届くところへ引き寄せておいて、座椅子に思いきり深く倚りかかる。大概、長電話になるからだが、べつに厄介な話をするわけではないから、できるだけ寛いで、寢酒のグラスも手に持ったままがいい。電話のあとはいもう眠るだけなのだから。

むこうでベルが鳴っている。その音で闇が顫えている。その顫えが受話器に伝わっ

てくる——誰も出ない。いつまでも出ない。ただベルだけが鳴っていて、闇の顫えの振幅がだんだん大きくなってくるばかりである。けれども、それで結構。誰も出なくていいのだ。誰も出ないのを承知でかけているのだから。人などいるはずのないところへかけているのだから。誰も出ないのが当然で、出たら却って狼狽する。

暗闇のなかでベルがむなしく鳴っているのは、何処かというところ、信州八ヶ岳の山麓の、白樺と唐松の林に囲まれた山小屋である。五、六年前の夏、冷房に背中の中の神経をやられて汗疹だらけになっていたとき、見兼ねたように世話をしてくれる人があつて手に入れたちいさな小屋だが、夏場を除くと滅多に足を運ぶこともなく、とりわけ冬の間は全く無人のまま雪とひどい寒さに鎖されてしまう。

そんな誰もいるはずのない山小屋などへ、夜ふけになると、まるでそこに親密な仲の女友達でもいるかのようにいそいそと電話をかけたたりするのは、日頃、絶えず胸に燃やしつづけている強い願望——できることならいまの暮らしから脱け出したい、仕事から、家庭からも、係累からも脱け出していつか、あの山小屋でひとり暮らしが

したいという、そんな願望にそそのかされて、とてもそうしないではいられなくなるからである。その願いが、一向に実現されないばかりか、愚図で何日か滞在してくる余暇さえ見つけ兼ねている有様だから、せめて寝酒が旨いと思える夜には、電話でもして山小屋を自分の方へ引き寄せたいのだ。

実際、受話器を耳に当ててむこうのベルに聞き入っていると、山小屋の闇が、ただ机に頬杖を突いて想像するより遙かに身近なものに感じられる。ぴりぴりと顫える闇が受話器を伝って、軀全体を押し包んでくる。やがてその闇に軀が融けて、自分はいま山小屋の闇のなかにいるのだと思えてくる。電気は元を切つてあるから、小屋の中は真つ暗闇だが、電話のベルが目になって、それが響き渡るところは隅の方までよく見える。雨戸の隙間から外へにじみ出るベルと一緒に、丸木を組んだ露台に出る。静まり返っているまわりの木立。頭上には、輝きすぎるほどの星がぎつしりとひしめいている重たい空。音といえば、時折ちいさな獣が熊笹を鳴らして走るだけで、あとはなにもきこえない。鼓膜を失つたのではないかと不安になって、軽く露台の床を踏ん

でみる。ついでに、段々を降りていって、前の小道を歩いてみる。そのまま、ついふらふらと遠出して、思わぬ長電話になったりする。

そんなふうにして無言の電話に耽ったあと、ふと長女の子供時分が思い出されて、ひとり笑いをすることもある。そのころは、貧しくて、安玩具しか買ってやれなかったが、いつかせがまれて電話を買ってやったことがあった。ダイヤルをまわすたびにちりんちりと音が出る、よく夜店などで見かけるあの赤いセルロイドの電話だ。

まだ三つか四つだった長女は、その電話を膝の上にのせて、ちりんちりとダイヤルをまわしては、口調ばかりではなく電話に向ってお辞儀をする癖まで母親をそっくり真似て、長話をしたり、時には受話器を耳に当てたまま放心したように相手のお喋りに聞き入ったりして、ひとり遊びをしていたものだが……自分のもあれに似ている。そう思うと、いい齢をしてとおかしくなるのだ。

その夜も、彼は確かに酔つてはいた。

長いこと辛抱しながらつづけてきた仕事にやつとけりをつけた晩だったから、あるいはいつもより酔いがいくぶん深かったかもしれない。その証拠には、珍しくダイヤルを二度もまわし損ねた。二度とも、途中で指先が穴から外れてしまった。

二度目にはさすがに舌うちが出たが、その上、おい、しっかりしてくれよ、と粗忽な右手の人差指に、ぶつと息を吹きかけたのはかなりな酔いのあらわれで、三度目によりやくまわし終えたあと、すぐに机上のスタンドを消して部屋のなかを暗くしたのも、酔狂といえど酔狂であつた。外は冬の月が冴えていて、窓越しに、庭の白木蓮の枝先の蕾が一斉に青白く光るのが見えた。

受話器を伝わってくる冷え冷えとした夜気に包まれて、忽ち小屋の闇に融け込んだところまでは、いつもとなんの変りもなかった。小屋は雪に埋もれていて、闇は少々